

## 小・中音楽科のなめらかな接続を図った教材開発 —「音楽科の中1ギャップ」を埋めるための表現活動の工夫—

所属校：東村山市立東村山第一中学校  
氏名：高道 有美子  
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：「音楽科の中1ギャップ」・中学校音楽科・教材開発

### I 研究の目的

#### (1) 研究の背景

所属校では、音楽が好きで熱心に取り組む生徒が多くいる一方、熱心に取り組めない生徒がいることも事実である。そのような生徒の中には「小学校の授業は楽しかった」という思いをもつ生徒もおり、すでに1年生次にその思いを口にする。そのような生徒は、学年が進行するにつれて授業に対する集中を欠くようになり、次第に楽しそうに取り組む場が減る。小学校での音楽の授業は楽しめたが、中学校では同じ音楽に対する意欲が低下するこのような現象を「音楽科の中1ギャップ」と考えた。

#### (2) 研究の目的

中学校音楽科の授業では、小学校6年間で育まれた「感じ取る能力」を生かし、鑑賞領域などで「感じ取ったことを自分の言葉で表現する」「感じ取ったことを生かして自分なりの表現の工夫をする」という学習活動を行っているが、中学校1年生には「感じ取る力」と「表現する力」の弱さを感じるものがしばしばある。特に「表現する力」が弱く、音楽で必要となる「音楽の言葉や技能を使って表現する」という力が十分ではなく「どう表現していいかわからない」ととまどう生徒も多い。また、指導により「わからない」という声が収まっても、表現されたものは十分とは言えない。

そこで本研究では、小学校と中学校の指導内容と指導方法を比較・検討することにより「音楽科の中1ギャップ」の原因を明らかにし、小学校の指導方法の長所を踏まえた中学校1年生1学期の教材を開発することを目的とする。それにより、授業に対し学習意欲が持続しない生徒も学習内容の習得がはかられ「音楽や音楽の言葉により表現する力」を養うことができるのではないかと考えた。

### II 研究の方法

1 新学習指導要領における小中音楽科の学習内容の比較

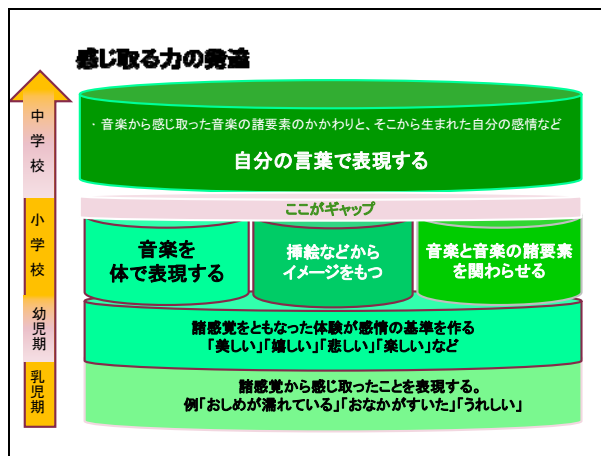
2 小中音楽科授業観察における指導内容と指導方法の分析・比較・検討

3 中学校音楽科第1学年学習指導案の作成、実践、評価、改善策の検討

### III 研究の結果

#### (1) 感じ取る力の発達

平成20年3月に告示された学習指導要領では、共通事項が設けられるなど、指導内容がより明確化されている。特に鑑賞領域では「感じ取ったこと（感受したこと）を言葉にして表現する能力」が求められる。そこで「感じ取る力」が乳児期からどのように発達するのかを捉え直した。



これにより「体や演奏で表現する」小学校と「自分の言葉で表現する」中学校の間にギャップがあるのではないかと考えた。

#### (2) 小中音楽科授業観察における指導内容と指導方法の分析・比較・検討

##### ① 単元構成の違いから生じる学習意欲の持続力

小学校では1単位時間の授業内で歌唱+器楽、歌唱+鑑賞、リズムリレー+器楽など児童は常に活動している。そのため得意な活動と苦手な活動が混在している。授業内での学習意欲は失われることはない。中学校では1単元完結型を目指すため1単元の学習活動は同じことが多く、生徒が苦手な学習である場合、授業が苦痛となり意欲を失う。

##### ② 単元の完結の仕方の違い

小学校は1単位時間内での活動が多いため、単元のまとめと学習で身に付いた力を自覚しにくく、学習が積み上がっているという感覚を児童がもてない。

また、発表機会の多さから「演奏を発表することが目的」となり、演奏するための技術の習得が先に立つこともある。中学校では1単元完結型を目指すため学習カード等を使用し、「感じ取ったこと」などを記入して積み上げていく。単元のまとめは明確である。

### ③学習活動の違い

小学校では「友達同士意見を出し合ってみる」という活動が多く見られるが、中学校では「個人の意見を尊重する」ことが多く、友達と話し合う・意見を述べ合うことは少ない。自分が感じたことを言葉にするためには、表現の手段とその方法を知っている必要がある。その力が十分ではない場合、自信喪失してしまう。

### ④支援の仕方の違い

小学校では児童の合奏などの技術が演奏に十分ではない場合、教師が声をかけ、休み時間などに個別練習を行う。「最低こまでは」というレベルまで引き上げられるため、児童は演奏に達成感や充実感を得ることができる。中学校では教師が声をかけることもあるが「自ら進んでわからないところを聞く姿勢」を求める。

## (3) 音楽科の中1ギャップとは

以上のことにより、音楽科の中1ギャップは

1. 1単位時間1領域の学習における意欲の低下
2. 感じ取ったことを表現する手段の違い
3. 評価のための個人活動重視による学び合いの機会の減少
4. 目指す演奏技術習得への支援の仕方の違い

が原因であると考えた。

## (4) 「音楽科の中1ギャップ」を埋める教材開発の方針

中学校では進路のために評価が重要となるため「音楽の授業での学び」を重視するあまり活動とのバランスが崩れやすい。そこで、中1ギャップを埋めるための手だてを教材開発の方針とし、感じ取ったことを言葉で表現する「鑑賞」と、演奏で表現する「創作」を教材とした。方針は以下の5点である。

1. 中学校の学習方法に慣れるよう1単位時間1領域は継続する。
2. 鑑賞領域により様々な雰囲気を持つ楽曲を扱う。
3. 自分の意見を表現しやすくするための学習カードを工夫する。
4. 創作領域において様々な楽器を使用する。
5. グループ活動を取り入れアイデアを出し合い、協力して発表を行う。

## IV 研究の成果

### 【鑑賞】

- ・映画音楽を教材にしたため、生徒の興味関心は大変高く集中した授業となった。
- ・多くの生徒が自分の言葉で学習カードを記入し、内容も全員が評価B以上であった。
- ・映像と映画音楽を組み合わせた学習により、「音楽の諸要素」と「曲の雰囲気」をより深くつかむことができた。

### 【創作】

- ・創作の授業前に多くの生徒が持っていた不安感がグループ活動により薄れ、創作の授業後は9割近い生徒が充実した感想を述べている。
- ・図形楽譜や言葉など、創作の学習の記録にも工夫が見られた。
- ・強弱、速度など鑑賞の授業での学習内容を踏まえて発表することができた。
- ・創作の授業後の歌唱や器楽の表現には、この単元の学習内容を生かした工夫が見られる。

## V 課題と考察

創作授業前の生徒に対する意識調査では、今回創作初体験の生徒ほど否定的な反応が大きかったが、創作授業後では創作経験の有無にかかわらず8割に上る生徒が「楽しかった」「達成感があった」という肯定的な意見を持ち、その後の授業も意欲的に取り組んでいる。しかし、2割の生徒は肯定的な意見を持てずにいる。これについて今後も教材開発の工夫だけではなく、原因を明らかにするとともに手だてや配慮などさらなる研究をしていきたい。

また、今回の検証授業は個人の演奏技術が問われるものではなかったため教材開発の手立てには入らなかったが、「小中学校の目指す演奏技術習得への支援の仕方の違い」は大きい。小学校の教師は「楽しく演奏するためにここまでできれば」と、一定のレベルまで引き上げるよう配慮し、児童は友達にも支えられる。しかし中学校に入学した途端、技術不足は自ら教師や友達に聞くなど「進んで行く努力」が求められる。義務教育9年間で段階を追って自立できる指導の発展こそが、小中両方にとってのこれからの課題なのではないだろうか。中学校音楽科としても、クラス発表やグループ活動、そして個人の能力も生かせる教材を開発し続ける必要がある。歌唱や器楽に偏ることなく、鑑賞や創作など広く教材を開発することが、音楽科の目標やねらいを達成できると考える。